

健康文化

ことばは測定装置としてどこまで使えるか？

村上 隆

1. あなたの自己実現の度合いは？

この小論を読み始める前に、この記事の末尾にある15の質問に答えてみていただきたい。各項目にあなた自身、「あてはまる」と考えるなら4、「あてはまらない」なら1をそれぞれの質問文の後の四角の中に記していただきたい。どちらとも決められない場合も「あてはまる」に近ければ3、「あてはまらない」に近ければ2を記入する。「どちらでもない」という答えは許されない。

(そんな面倒なことはごめんだという方は、すぐ次に進んでいただいても差し支えないが、筆者の言おうとすることを、若干ご理解いただきにくくなる可能性はある。)これは、アメリカの2人の研究者によって作成された自己実現尺度 (self actualization scale) の翻訳である。答え終わったら、次の手順で採点しよう。

- 1) 8、9、11、13、14の5つの項目を除く10個の項目への反応(細枠内の数値)の合計を求める。
  - 2) 今除外した5つの項目に対する反応(太枠内の数値)を合計し、1)で求めた値から引く。
  - 3) 2)で求めた値に25を足す。(これで、1)で除外した項目は数値化の方向を逆転して、つまり、4を1に、1を4に変えて加算したことになる。)
- これが、あなたの自己実現の程度である(!?)。図1に、大学生1607名か

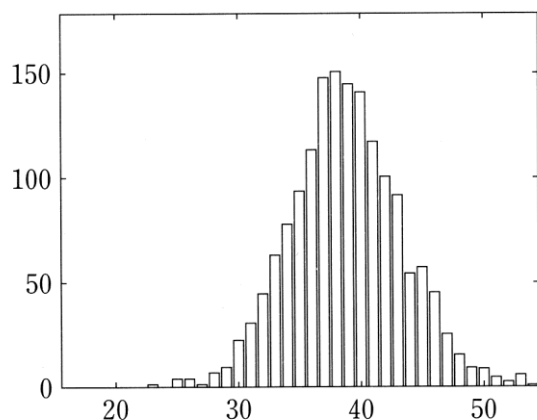


図1 SASの得点分布

ら得た結果があるので、あなたが平均的な「大学生」と比べて、どの程度自己実現を達成しているかを知ることができるであろう。

## 2. 自然言語による心理的個人差測定

もしあなたが今の結果に対して何の疑問も抱かれず、自分の自己実現の程度について知ることができて満足だとお感じになるなら、失礼ながら、本誌の読者としてはかなり批判精神に乏しい方と言わなければならないであろう。

(よくある「心理ゲーム」のようにお楽しみになったのなら、それはご自由であるが。)たとえば、次のような疑問は当然、おもちになってしかるべきである。

- a) 「あてはまる」、「あてはまらない」といった言語的な反応をそのまま加算するという数学的「演算」は許されるのか？
- b) 5つの項目だけを特別扱いして「逆転」したのはなぜか？
- c) なぜ、この合計点を「自己実現」の程度と呼ぶことができるのか？
- d) (あなた自身はともかく)被験者は本当のことを答えているという保証があるのか？

一方で、こうした自然言語による質問を用いた「測定」が、精神科以外の医学の世界にも次第にとりいれられつつあるのも事実である。たとえば、患者の「気分良さ」を測るとされる QOL (Quality of Life) という質問紙 (questionnaire) には、制癌剤の認可を左右するほどの重要性を与えられているようである。また、マタニティ・ブルーのように明確な診断基準が存在しない症状の診断にも質問紙は不可欠である。

今回は、上に述べた疑問の a) と b) に関わる部分についてだけ、簡単に論じることで責めを塞ぐことにさせていただく。

## 3. データにもとづく判断が不可欠

こうした質問紙を、単なる心理ゲームと隔てているものは、実際のデータにもとづく実証的評価がともかくもなされていることである。もっともその評価の程度は、さまざまであるが。

それについて説明するために、このように、言語的な質問に対する回答を数値化して加算するような扱いをする根拠について考えてみよう。

われわれは、自分自身や他者の能力や性格、態度といったものの、量的次元を直観的に考えることがある。そうした印象の根拠は、個人の振る舞いや言語的報告についての経験の蓄積と、それを複数の個人間で比較することからなっ

いると思われる。このような個人差に関する量的次元のことを特性(trait)と呼び、このような認識の方法を類型論 (typology) と対比して、特性論 (trait theory) と呼ぶ。

SASのような、複数の質問に対する反応を求めるような質問紙の目的は、(項目ごとに反応を集計することではなくて、) それらの項目を分類した上で個人ごとにその反応の合計した尺度 (scale) を作ることである。こうした方法は、個人の言語報告を組織的に収集しようとするものであり、素朴な特性論の考え方を科学的方法論として実現しようとするものである。個々の項目反応は、当該の特性の指標 (index) と考えられる。

こうした判断の根拠となるのは、項目間の相関係数である。もし、一群の項目が同一の特性の指標と考えられるなら、それらは相互に、少なくとも無視し得ぬ相関をもつはずだからである。一方、(当該の特性とは独立な) 異なる特性に対応する、あるいは、何らの特性にも対応しない項目は、それらの項目群と相関を持たないはずである。

表1に、SASの項目間の相関関係の例を示した。(A)は、これらの項目の間でもっとも相関の高い項目4と12との間の連関表、(B)は、全く相関のない、項目2と項目12の間の相関表である。高い相関と言っても相関係数にして0.33であり、この表だけでは、この2つの違いがはっきりしないと思われるかもしれない。しかし、実際にこうした質問紙で問題になるのはこの程度の相関であるので、ともかく、この2つの表を見比べてみていただきたい。

表1 SASの質問項目間の連関表

(A)						(B)					
	項目4				合計		項目2				合計
	1	2	3	4			1	2	3	4	
項目4	18	26	61	45	150	項目4	34	81	26	9	150
項目3	101	270	289	73	733	項目3	124	446	135	28	733
項目2	168	238	130	28	564	項目2	100	322	118	24	564
項目12	86	38	21	15	160	項目12	56	61	24	19	160
合計	373	572	501	161	1607	合計	314	910	303	80	1607

いずれにせよ、相関のある項目の背景には、共通した何か、直接は観測できないが潜在的な「特性」が存在していると想定することができる。(A)の場合、質問の内容からするとそれは「結果を恐れずに自己主張ができること」といった特性のように思われる。その特性は、項目、1、8、14にも共通であり、実際、

これらの項目間にも無視し得ぬ相関が存在する。

項目8と14は残りの項目と逆相関であり、だからこれらは逆転して足す必要があったのである。

ところで、(B)で項目12と無相関だった2についてはどうであろうか。これは、上記の項目群と足しあわせることが不適切と考えられる項目である。しかし、これはまた、項目3、5、11、13、15などとともに、「他者との連帯感」とでもいうべき特性を反映していると思われる。ここでも、11と13は逆転項目である。

このように、1つの質問紙に含まれる項目がすべて、尺度構成に適切であるとは限らない。また、測定しようとしている特性(概念)は、幾つかの下位概念に分かれる場合があり、単一の尺度ではなく、それらの下位概念に対応する複数の尺度を構成する方が適切な場合もある。得られたデータから、そうした判断をある程度客観的に(研究者の主観によらずに)、自動的に行うことのできる手法が因子分析、あるいは、主成分分析といった多変量解析の手法である。

#### 4. 終わりに

以上はもちろん、問題の一端にすぎない。とくに、この尺度がなぜ「自己実現」を測定していることになるのか、その確認は心理測定の妥当性(validity)の問題であるが、それは、与えられた紙数では到底語り尽くせない。しかし、言語によって人間の心理的特性を測定することの難しさと面白さの一端を、この小論から感じとっていただけたら、筆者としては望外の喜びである。

(名古屋大学教育学部教授)

### 付表1 SASの質問項目

1. 自分がどんな感情を持っても、それを恥ずかしいとは思わない。
2. 他の人が私に期待していることは、しなければならないと思っている。
3. 人は本質的には善良であり、信頼できると思う。
4. 好きな相手に対しても、自分は平気で怒ることが出来ると思う。
5. 自分のすることをいつも他の人が認めてくれていることが必要だと思う。
6. 自分に弱点があるとは思えない。
7. 立派な人と思えない人でも好意を持つことが出来ると思う。
8. 私は失敗するのがこわい。
9. 私は複雑な事柄を分析したり、単純化することは苦手である。
10. 他の人からの人気よりも、自分自身であることの方が大切である。
11. 人生において特別に自分がやらなければならない使命があるとは思わない。
12. 良くない結果を招く恐れがあるときでも、自分の気持ちを表すことができる。
13. どんな人でも助けなければならないという責任はないと思う。
14. 自分が不十分だという恐れに悩まされている。
15. 私は愛するが故に、愛されていると思っている。